# 【地域活動】

## 大木農園

大木農園企画は、2009年に大学で実施された「エコキャンパス計画」の一つとして、戸塚区内の農家・大木敏幸さんの野菜を学食で使用するようになったことから始まった。「地産地消」のテーマのもとに大学と大木さんとの協力関係が築かれており、このつながりを学生の環境教育に生かそうと、ボランティアセンターを通して学生が農業体験をさせていただくことになった。今年度、この企画は4年目を迎えた。

大木農園は、化学肥料の使用をできる限り抑えた有機農法で栽培している。参加学生の中には、もとから環境や農業に関心を持っている人もそうでない人もいるが、活動中に大木さんからお話を伺うことで、有機農法に関することだけでなく食問題など、幅広い知識を得ることができる。

また参加する学生のほとんどが農業未経験者であり、めったにできない貴重な体験もさせていただいている。そのため、初めての体験が面白くて次回からの活動にも継続して参加してくれる学生も多くいる。広報の手段として、一昨年前から導入されたメーリングリストを効果的に利用できていて、今年度はリピーターの学生を中心とした活動となった。継続的な参加は農園側にとっても望ましく、継続的に関わることで学生の知識も深まり農業や環境への理解も進んでいるように思う。

今年度も、恒例の夏のバーベキューを行い、大木さんと、そして参加者同士の親睦を深められたが、今年度は昨年度に比べイベントが少なかった。参加人数が少なくなってきていることも課題の一つだ。今後、バーベキュー以外のイベントの開催など、もう少し活動のバリエーションを増やし、農業に関心を持ってもらうきっかけづくりと、より多くの学生に参加してもらうための工夫に力を入れたい。

（学生メンバー　国際学部国際学科２年　赤池萌奈）

大根の種植え

里イモ掘り

## どうせ登校するなら

【活動の目的と内容】

気軽に始めることのできるボランティアとして学生へ紹介しているのが、ゴミ拾いボランティア「どうせ登校するなら」である。

環境への配慮を学びつつ、明学生間をはじめ、色々な人たちとの交流の場となることを目的として実施してきた。また、学生が集まって駅から住宅街を通りキャンパスへ向かうことから、空き巣被害の予防など、防犯の面にも注目して活動している。

活動は基本的に、長期休暇を除く毎月第２週の水曜日、朝８時に戸塚駅地上改札前に集合し、防犯キャップとボランティアセンターの腕章をつけ、ゴミを拾いながら大学指定の正規通学路を通って登校する。毎回、１限目の授業に間に合うよう、目的地である横浜キャンパスへは朝９時頃の到着を目安にしている。

昨年から神奈川県警察とのつながりができたため、活動中に県警の方に同行していただくことも多い。

「どうせ登校するなら」の活動中

「スポーツＧＯＭＩ拾い」での集合写真

【その他の活動】

学内外の人たちもチームを組んで参加する、いい物件リスト株式会社主催の「スポーツＧＯＭＩ拾い大会」へも参加している。今年度は、名前通りの「登校」時に活動するほかに、同じ内容で 17 時に大学を出発し駅へと向かう「どうせ下校するなら」を新たに実施した。また、横浜キャンパスの近くにある倉田小学校で、６年２組の生徒たちとともに総合学習の授業として環境美化や防犯意識についての活動をし、彼らに講義を行うなど、意欲的に活動の場を広げ、活気ある活動となった。

（学生メンバー　文学部フランス文学科２年　浅井絵理子）

## 倉田小学校

【企画が始まった経緯】

ボランティアセンターと、横浜キャンパス正門そばにある倉田小学校（以下、倉田小）の関係が本格的に始まったのは、2010 年のことだ。きっかけはボランティアサークル「ぽけっと」（カンボジア学校建設を目標に設立された団体）に所属し、倉田小と関わりがあった先輩が、子ども達のためになる取り組みを始めたことによる（詳細は『2010 年度活動報告書』78 ～ 79 ページ参照）。「明学と倉田小をつなぐパイプ役となる」という思いから、明学と地域の相互理解を深めることを目的としている。

【企画の活動内容】

活動内容は主に特別支援学級での先生方のサポートだ。実際に学生が授業に入り、授業でつまずいているところなどを教えたり、休み時間や掃除の時間にも参加して交流を深めている。

それに加え、年間行事（運動会・宿泊合宿）にも参加している。今年度は、７月に行われた小学４年生の横浜市野島での１泊２日の宿泊合宿の引率にも関わり、児童の活動指導などをさせていただいた。その他に、倉田小ではないが、同じ小学生を対象とする企画ということで、９月にＭＧ子どもの企画である、ＹＭＣＡ東とつか学童クラブでの防犯の寸劇に参加した（詳細は本活動報告書 66 ページ「ＭＧ子ども」の項を参照）。

【今後に向けて】

昨年度まで年間を通して続いていた小学校での田植えの授業のお手伝い（代掻き、田植え、草刈、稲刈り、脱穀、餅つき）には、残念ながら今年度は参加できなかった。田植えを通して小学校と学生がつながることは私たち学生の学びを深める良い機会なので、次の代では参加を実現してほしい。

そして、企画に携わる学生が少ないなか、今年度は学生メンバーだけでなくボランティアサークルＯＰＥＮＲＯＯＭのメンバーが継続的に参加してくれている。障がい者の方を対象としているボランティア活動という共通点があるので、今後もこのつながりを大切にし、明学生どうし互いに協力して地域で活動できる関係を築いていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会学科２年　穴井繭）

## ＭＧ子ども

【活動経緯】

ＭＧ子どもは、我々学生メンバーや一般学生の、将来子どもに携わる仕事に就くこと、あるいは子どもと関わり自らの視野を広げたいと考えている人たちの希望に応え、2011 年度から始まった。2012 年度から本格的な活動を展開させ、一般学生の募集を行っている。

【活動内容】

現在、川上保育園と、戸塚区地域子育て支援拠点「とっとの芽」にて、月に一度ずつ活動を行っている。

川上保育園では、七夕のお飾りや誕生日カード作り、運動会リハーサルの補助といったお手伝いを行った。子どもたちと遊ぶ時間には、外では鬼ごっこや泥遊び、室内では読み聞かせやままごとなどをした。昨年度よりも年齢の低い子どもたちと接する機会が増え、信頼を得られているように感じたこと、回数を重ねる毎に、子どもたちが名前を覚えてくれ、「今度はいつ来るの？」と声をかけられるようになったことを嬉しく思う。

「とっとの芽」では、施設の掃除から始まり、広場で子どもたちと保護者の方と過ごした後、手遊びや大型絵本の読み聞かせをするというのが基本的な活動の流れである。双子・三つ子の会や、ベビーマッサージといった行事に参加させて頂くこともあり、毎回充実した時間を過ごしている。

また、今年度は、神奈川県警の方からお声掛け頂いたことをきっかけに、倉田小学校担当の学生メンバーとともに、誘拐防止寸劇を実施した。神奈川県警の子ども防犯教室の台本を基に、誘拐防止のためにどうすれば良いか子どもたちに考えてもらうことが目的である。「とっとの芽」の職員の方からのご紹介で、ＹＭＣＡ東とつか学童クラブで行った。少しでも子どもたちの記憶に残るものとなっていれば幸いであるが、何より、今回の寸劇が生かされるような場面に子どもたちが出遭わないことを強く望んでいる。

【反省・展望】

今年度は、元来の活動先との繋がりにより、防犯寸劇という新しい試みを実現させることができた。ご協力頂いた多くの方々に感謝申し上げるとともに、人との繋がりや出会いに恵まれたことを嬉しく思う。

また、布の名札の作成や、一般学生との待ち合わせの目印としてボランティアセンターの黄色い腕章を取り入れ、より良い活動を目指した。

今後の展望としては、一般学生への周知活動に力を入れていきたいと考えている。

そして、これからも活動先で出会った方に「また来てね」と言ってもらえる活動であり続けたい。

（学生メンバー　文学部芸術学科２年　斎藤由貴）

## ＭＧパール

ＭＧパールは東南アジアのボルネオ島の環境保全を目的として 2008 年から活動している。今ボルネオ島では先進国に輸出するパーム油を作るためにプランテーションが拡大し、動物たちの住処である熱帯雨林の減少が問題になっている。ＭＧパールはこの森を守るために、ボルネオ島原産の淡水パールを使ったオリジナルアクセサリーの製作・販売をして売上の半分をＮＰＯ法人ボルネオ保全トラストジャパン ( ＢＣＴジャパン ) に寄付している。寄付はＢＣＴジャパンの展開する「緑の回廊プロジェクト」という、プランテーションになってしまった森を買い戻していくプロジェクトに使われる。

私たちはボルネオ島の現状についての啓発活動を特に重視している。ただアクセサリーを売るだけでなく、その商品の裏にあるストーリーを伝えることが大切である。学生生協で販売する商品のパッケージには活動趣旨を記し、イベントに出店するときにはお客さんと直接お話することを大事にして必ずパンフレットを添えている。また、ＢＣＴジャパンから講師をお招きしての講演会も行っている。加えて今年度は、初の試みとして白金にお住まいのアーティストさんのホームギャラリーに出品させていただいた。学内における主な活動は生協での販売と製作会である。製作会は一般学生も受け入れており、今年度は参加数がかなり増えた。

今後は、魅力的な商品開発と今年実現できなかった他サークルとのコラボ企画も進め、戸塚まつりや白金祭への出店も計画している。課題として講演会や発表会を増やし、白金と横浜の両キャンパスでの活動の幅を広げること、長期休暇の有効利用があげられる。学外でのイベント出店やボルネオ島へのスタディツアーなどで長期休暇の有効利用をしたいと思う。ツアーに行くことでその後の活動に対する意識やモチベーションが変わるので、さらなる活動の発展のためにもスタディツアーを実現させたいと考えている。

ホームギャラリーの様子

生協での販売

（学生メンバー　国際学部国際学科２年　赤池萌奈）

## 山黒

【はじめに】

山黒とは、障がい者支援団体に関わる学生のネットワークを構築するために発足したプロジェクトである。より多くの学生や地域を巻き込んだ企画や、各団体での関わりから得たことを生かした企画が立案・実施できると期待している。また福祉に関心が無い学生や地域住民に障がい者の事を知ってもらい、新たな人と人とのつながりを生み出していくことを目指している。今年度は「みんな de ごはん」の開催や、学内に障がい者を招いて交流する「白金でまったり過ごす会」などの活動を行った。

【活動報告】

グループホーム「レインボー白金」でおこなう「みんな de ごはん」は月に１度、“匠”がレシピやメニューを決めて季節にあった料理をみんなで作り、レインボー白金の皆さん、学生、地域の方たちで歓談しながら食べるというものである。いつも工夫が凝らされた料理が並んでいて、季節にあった旬のもので作る料理はとてもおいしく、学ぶこともたくさんあった。自分たち学生がこれまで作ったことがない料理にもチャレンジできるので、毎回楽しみにしている学生も多い。私たち学生が匠をする場合には「ワンコイン (500 円 ) で笑顔を作る」といったコンセプトでメニューやレシピ、またレクレーションも考えた。下の写真は１月に行われた恵方巻きを作った会である。

【成果と反省・今後】

今年度は主に「みんな de ごはん」が多く、「まったり過ごす会」は夏に１回開催したのみとなってしまった。そのなかでも新たな出会いや人と人とのつながりも増え、視野も広がった。今年度の「みんな de ごはん」に参加した学生のなかには、これを機に特別支援学校の教員の道に進むことを決意した学生もいた。このように今まで持っていた障がい者に対する考えが変わり、面白い活動になっていくことが、目に見えてわかった。また参加してくれた方が、最後には笑顔になり、「また来たい」「楽しかった」と言っていたことが嬉しかった。今年度の反省は広報が遅かった事もあり、人がなかなか集まらなかったことである。毎回来てくれた方はいたが新規の方はなかなか集まらなかった。広報をもっと早く出すことと、広報の仕方を今一度検討するべきである。来年度は「まったり会」も増やし、活気のある活動にしたい。

2013 年８月「まったり過ごす会」

2014 年１月「みんな de ごはん」

（社会学部社会福祉学科３年　吉田詩織）

## ボトルキャップ

ボトルキャップ活動では、発展途上国の子ども達の命を救うワクチンを提供するために、ペットボトルのキャップを集めている。2013年度の主な活動は、横浜キャンパスではボランティアセンター内だけにしか置かれていなかったペッタちゃん（ペットボトルキャップ回収ボックス）の設置箇所を増やすことや、回収手段･回収結果の掲示方法の確立、広報の強化である。学内サークル「エコキャンパスミーティング」（以下、「エコキャン」）や生協の方々のご協力を得た。

エコキャンとの活動のきっかけは、ボトルキャップのメンバー内で、リリパック回収ボックスの隣にキャップ回収ボックスを置くというアイデアからだった。以前はエコキャンと合同で、月末の火曜日の昼休みに、回収ボックスをもって学生に回収を呼び掛ける活動をしていたが、目に見える成果を得られなかったので、回収ボックスを増やすことにした。エコキャンは生協の方ともつながりがあり、生協にはボトルキャップ回収率向上の援助として、キャップ回収ボックスを５箱購入していただいた。それらを装飾して、７号館、９号館、ボラセン前、Ｇ館生協、Ｃ館食堂の５ヶ所に設置した。クリスマスにはサンタクロースの「仮装」もした。

回収は、毎週水曜日から隔週水曜日に変更して数回実施した。回収結果の掲示方法はメンバー内で話し合い決めたが、まだ実施できていない。広報の強化は、来年引き継ぐ１年生たちと話し合った結果、今までも行ってきたTwitterに加え、立て看板、ポスターなども制作することになった。今年度は、集まったキャップのなかから、ボラフェスタ（70ページ参照）のメンバーと協力して、キャップのアートを作る企画にも取り組んだ。

清掃の方がキャップを集めてボランティアセンターに持って来てくださったり、自宅でたまったキャップを定期的に持って来てくれる学生もいたりして、活動が学内でも定着しつつあるのを感じる。これからも、回収されたキャップが子どもたちの役に立てるよう、活動していきたい。

ボトルキャップ回収ボックス“ペッタちゃん”

ボトルキャップ分別中の様子

（学生メンバー　国際学部国際学科２年　川口愛美）

## ボラフェスタ in Kanagawa

ボラフェスタ in Kanagawa とは、神奈川県内の大学のボランティアサークルが集まり、日本赤十字社神奈川県支部と学生の協働で、普段の活動紹介や参加者で楽しめる企画を行うイベントだ。また、献血を若い世代に広めることを目的としている。なぜ若い世代の献血が必要とされているのかというと、少子高齢化社会を迎え、がんや心臓病の手術などで輸血が必要な 50 歳以上の中高年世代の人口が増えているのに対し、比較的健康な血液を持つ若者の数が減っているためだ。ボラフェスタには、私たち明治学院大学の他に、日本大学、神奈川大学、相模女子大学等が参加している。他大学のボランティアサークルの活動を知ることができること、他大学生と交流ができることも、ボラフェスタの魅力と言える。

本年度は、ボラフェスタが 10 周年を迎えたこともあり、例年よりも学生に活気があふれていた。私たちは、ボランティアセンターの活動紹介パネル展示に加え、ボトルキャップアートをブース内で実施した。ボトルキャップアートは、明治学院大学内で集まったペットボトルのキャップを色別に並べて、発泡スチロールで作った土台にした絵を描き、来場者に絵に合った色のキャップを手に取ってはめてもらい、絵を作る、というもの。キャップを集めて業者に寄付をすることでワクチンに変換できること、$CO_2$ を削減できることを発信した。

ボラフェスタの目的のひとつである献血。来場者の方々はもちろん、多くの学生も献血していた。はじめて献血を体験する学生もいた。現在、若者が継続して献血に参加していくことが求められている。そのきっかけとして、このボラフェスタが存在しているのだ。

イベントに参加して終わりにするのではなく、日ごろ私たちが献血の大切さを周りに発信することや、ボランティア活動に対しての私たちの意欲を高く維持させていくことが大切だと思う。

（学生メンバー　法学部消費情報環境法学科２年　上口茜）

## ＣＯＴ（Center Of Totsuka）

以前行われていた区民市に変わる新しい企画であるＣＯＴ（Center Of Totsuka）はとつか区民活動センターとの連携でうまれたコラボレーションである。地域交流を一番の目標におき、地域で開催された行事に数回出店した。また、来年度からは「大学生から大学生」へ向けての町新聞を作成する予定である。自分たちの通っている大学がどのような地域にあるのか等、戸塚を知ってもらうきっかけ作りを目標にしていく。

長年続いた横浜地域企画「区民市」は、2013 年春にいったん活動を停止した。主な原因は、西口にあった戸塚区役所の移転である。「地域交流」を目的とする新しい企画を立ち上げるべくまちづくり関係者との関係作りを模索し、とつか区民活動センターに出合った。彼らからボランティア企画・運営を中心にした学生団体を作らないかと提案され、私たちも同意。

こうして「ＣＯＴ」が誕生した。

この数ヶ月間で、私たちは二つの大きなイベントに関わることができた。

① スポーツレクレーションフェスティバル（10 月 20 日）

私たちは「世代間交流」をメインコンセプトにおき、「縁日」を開いた。スタッフは皆浴衣を着用し、装飾（提灯・やぐら）や出し物も「縁日」をテーマに制作した。

フェスティバル参加者との１コマ

② 戸塚お結び広場（12 月１日）

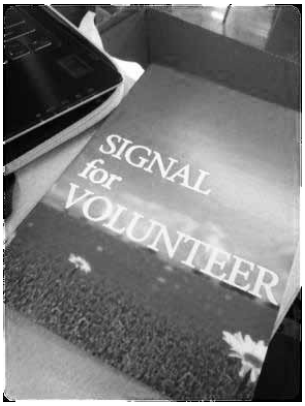
次に参加した戸塚お結び広場では、ＣＯＴの経緯や活動、今後の活動を共有し、他の戸塚を拠点にしている多くのＮＰＯ（特定非営利活動法人）やボランティアグループと交流した。また、この際に町新聞を作成する案も生まれ、サンプルとして「町新聞ゼロ号」を展示し、来場者のアドバイスやニーズを伺った。

2013 年７月に本格的に活動を開始し、まだ６ヶ月程しか経っていない。そのため、目的は同じでもまだ活動が安定していない部分もある。しかし、メンバーや職員、とつか区民活動センターの方々とも相談した結果、ＣＯＴとして、過去の活動を生かし、今後定期的に大学生のための町新聞を作成し、ゆくゆくは戸塚を拠点にしている多くの団体とコラボできるようにする。また、昨年と同様にお結び広場のような大きなイベントにも参加し、より一層地域交流に取り組んでいきたい。

（学生メンバー　国際学部国際学科２年　秋川詩乃）

## ＭＧＶＡ (Meiji Gakuin Volunteer Association)

明治学院大学にはたくさんのボランティアサークルがあるが、それぞれのつながりは薄かったため、お互いの理解を深めようと、ボランティアセンター内にＭＧＶＡ (Meiji Gakuin Volunteer Association) が作られ、2012 年４月から本格的に活動している。



パンフレット

ＭＧＶＡでは、

１．ボランティアセンターとボランティアサークル

２．ボランティアサークル同士

３．学生とボランティアサークル

という、３つの“つながり”を強めることをめざしている。

今年度は、１月～４月にかけて、ボランティアファンド学生チャレンジ賞の助成企画として､｢ボランティアサークル紹介カラーパンフレット｣を作成した。この企画は、カラーパンフレットを作成し一般学生に配布することで、ボランティアサークルの認知度を上げ、学生のボランティア人口を増やし、学内の社会貢献活動を活発化させることを目的としている。

各サークルへのインタビューは初の試みだったが、全 13 団体の協力を得て、４月のボランティアサークル説明会等で、700 部を配布した。

そして、５月にはボランティアサークル座談会を実施し、60 名もの学生が集まった。また、カラーパンフレットを使うことによって、多くの新入生にボランティアサークルの魅力を伝えることができた。

10 月には、横浜隼人高校とのコラボレーション企画として、学内のボランティア活動を高校生に知ってもらおうと、ワークショップを横浜隼人高校にて実施し、ボランティアサークルからも参加があった。高校生だけではなく大学生にとっても、有意義な時間になり、ボランティアサークルからも、「次回もこのような機会があれば参加したい」「今後もこのつながりを大切にしたい」などの声が聞かれた。

座談会参加者との記念撮影

今後も、ＭＧＶＡから生まれたさまざまなつながりを大切に、明治学院大学のボランティア活動が活発化するよう、イベント実施やボランティアサークルの魅力を発信し続けていきたい。

（学生メンバー　国際学部国際学科２年　氏家知香）

## 学生事務局から今後の展開について

学生事務局とは2012年にボランティアセンターが組織編成された際に新たに発足した組織であり、ボランティアセンターでの活動を経験した４年生１名と３年生５名で構成されている。現在ボランティアセンターは「白金地域活動」「横浜地域活動」「Do for Smile @東日本プロジェクト」「1 Day for Others」、「海外プログラム事業部」「明学レッドクロス」「ＳＨＩＰ（Social Hub Information Partners)」「学生事務局」の８つセクションがある。「明学レッドクロス」や「ＳＨＩＰ（Social Hub Information Partners)」など今年度新たに加わったセクションもあるため、セクション間での情報共有、連携がより一層重要となった。そのため、今年度の学生事務局の活動目標を、ボランティアセンター職員と学生、セクション間での情報共有と、セクション内のイノベーションを図ることの二つとした。

具体的な活動として、学期毎に各セクションのリーダーを集めたミーティングを行い、オープンキャンパスにおける反省をするとともに、お互いの活動に対する理解を深めあった。また、今年度から受験生向けの広報活動として年５回開催されたオープンキャンパスに参加し、学生代表として全体の指揮をとり、全セクションがスムーズに動けるようまとめた。このような活動を通じ、学生メンバーを総括する役割として学生事務局の必要性を改めて認識すると同時に、その困難さを学ぶことができた。

各セクション間の連携や情報共有などの点ではボランティアセンターに貢献できたものの、事務局メンバー５人では当初予定していたイノベーションを行うことはできなかった。さらに、残念ながら現在３年生のメンバーは就職活動、学問に専念するため今年度をもって学生事務局を退くこととなった。

しかし、今後も各セクションが活動により専念するうえで、学生・教職員間の連携、他セクション間での情報共有などを行う学生事務局は重要なセクションである。来年以降も学期毎にセクションミーティングを行い新たな交流を促すことや、新リーダーの顔合わせという意味も含めた合同報告会を３月に企画した。また、２月25日から行われる学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会に参加した。こうした活動を通して、今後も積極的に他団体との繋がりを作っていくことが重要であると認識している。この活動を継続するためにも来年度学生事務局メンバーを現在募集中である。

(学生メンバー　国際学部国際学科３年　佐藤亜紀)

(学生メンバー　社会学部社会学科３年　石井太朗)

(学生メンバー　経済学部経済学科３年　照沼俊貴)